



## I テルナテへ

1996年12月5日、アンボンのムティアラホテル (Mutiaara Hotel) を朝5時にチェックアウトする。西瀾さんと二人が支払いを終えるのに25分かかる。後で領収書をみると部屋代92,000ルピアに、税金10パーセント9,200ルピア、サービス料10パーセント9,200ルピアを加えて110,400ルピア、それから部屋代の25パーセントディスカウントということで23,000ルピアが差し引かれ、支払い額は87,400ルピアという何とも奇妙な計算がされている。1,000ルピアが約50円という交換レートだから、日本円にして約4,370円である。チェックアウトの手続きは終わったが、昨夕予約を頼んでおいた自動車が来っていない。多分、運転手が寝坊をしているのだろうと言う。電話で別のタクシーを呼んでもらう。空港は天然の良港として知られる深く入り込んだ湾の反対側にある。運転手はスピードマニアに類して、1時間はかかるとみた空港への道を、早朝のせいもあって30分でとばし、ムルパティ航空のカウンターでチェックインを済ませる。アンボンからテルナテへは、ムルパティ航空からチャーターされた三十数人の乗客を運ぶ双発のプロペラ機が日に一便就航している。テルナテはマルク州に属し、アンボンは同州の首都なのである。元々の計画は翌12月6日に、田中さん、加藤さん、ラビアンさんと一緒にアンボンからテルナテに向かうことになっていたが、6日の便がわれわれ5人を同時に乗せることができず、5日なら空席があるというので2人がアンボンに一泊しただけで先発することになったのである。

セラム島、オビ島、パチャン島などを眼下にみて約1時間半でテルナテ島に着陸する。マルク (モ

## テルナテへの旅

坪 内 良 博\*



写真 I テルナテ島

ルッカ)、すなわちかつての香料諸島は、その支配権のあり方をこの細い線によって留めている。後で分かったことだが、テルナテからメナドへスンパティ航空の定期便が運航している。1時間ばかりの飛行はこの島をかつての船の航路で隣の州の都市へつないでいる。

## II テルナテ島

テルナテ島は、周囲40数キロメートルくらいの小さな火山島だが、5万人程度の人口を擁し、この辺りで唯一の空港の所在地でもある。町は海岸に近い大通りとそれに平行する他の二つの通りを中心に形成され、2,3万の人口をもつようにみえる。町の向かい側にはハルマヘラ島がその巨大な島影の一部を横たえ、テルナテ島と双子のような形態をもつもう一つの火山島ティドレが、その秀麗な姿をすぐ近くに見せている。

島の周囲には舗装道路が巡らされていて、2時間もあれば全島を一周することができる。海岸線には集落が点在し、町外れの高処には博物館となっているスルタンの宮殿が位置し、比較的町に近い場所に、ポルトガル人、スペイン人、オランダ人の築いた砦の跡が残っている。これらの砦の一つから町の方角を眺めると、すぐ下方に湿地を好むサゴ椰子の茂みがあって、その中にこんこんと水の湧きだす泉

\* Yoshihiro Tsubouchi, 京都大学東南アジア研究センター; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

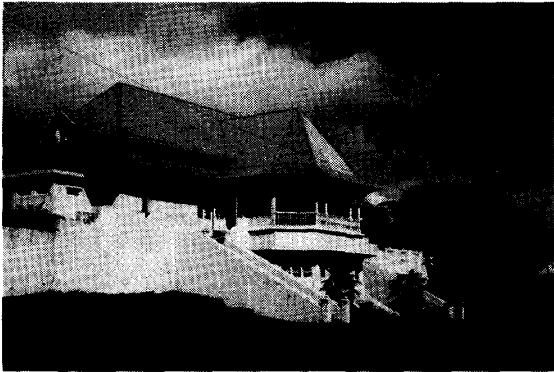


写真2 テルナテ王宮、今は博物館

がある。島にはサゴ椰子が多くみられるが、人々の常食はいまでは米になっている。この島には水田はなく、米はスラウェシ島のウジュンパンダンあたりから運ばれてくる。島を巡る道路にそって丁字やナツメグの木が見え隠れする。最近ではカカオなども栽培されている。ココ椰子の実を集めてコブラを作っているグループを見かけたり、底の方が尖った背負い籠に収穫したキャサバを入れて家路に向かう女性に出会ったりする。

丁字は香料諸島の特産物で、16世紀頃からポルトガル人やスペイン人達が入手に奔走したが、やがてオランダ人が介入して、貿易を独占するために栽培地をアンボン付近に限定しようとして、テルナテをはじめ多くの島々の丁字の木を切り倒してしまった。丁字の木を切り倒した話は今日まで語り継がれているが、テルナテの火山の中腹には現在最高の樹齢をもつといわれる丁字の古木が残されているという。

ポルトガル人やスペイン人達が築いた砦は、ヨーロッパの古城に似て、町や村から孤立した拠点であったように見える。それらは海を介してヨーロッパを望み、土地の支配者との繋がりあるいは競合の関係を有していた。これらの存在をどのような意味で「支配」と呼ぶかは吟味する必要がある。

支配といえば、テルナテは食料補給と交易品としての丁字の確保のために、16世紀末ないし17世紀末の時点で、72の島々を支配していたといわれる。この「支配」が、武力制圧をとまなう実質的なものであったか、それともテルナテの文化的中心性を認めるに過ぎないものであったのかという問いが投げ掛けられている。当時、10,000人に達することがあっ

たとは思われないテルナテにとって、この広域の支配が如何なる意味で可能であったかというのである[Van Fraassen 1994: 23]。いわば、往時の淡路島が日本全国を支配したというような状況である。この問いに対する答は、先に挙げた見通しの両方が正しいということになる。

このような海域の世界では、主要な集落は海岸に立地しており、それぞれの規模は決して大きくない。いくばくかの規模の卓越とある程度の連合はスーパーパワーの成立を可能とし、海という通路が勢力の派遣を容易にするという理由を挙げて、「支配」の成立が容易であることをむしろ積極的に認めてもよいと思う。支配の定義にもよるが、海域の世界における支配と、森林の世界における集落の独立性とは対比的に捉えられるかもしれない。後者においても名目的な支配関係は存在するし、またそれなりの意味があることを考えれば、実質的な内容を提示せずに「支配」という抽象語を使うことが混乱のもとになるのかもしれない。

### III ティドレ島

12月7日、一行5人は朝9時のフェリーでティドレ島に向かう。フェリー乗り場は16世紀の古い港であったところで、近くにベンテン・カリマタと呼ばれるポルトガルの海の砦の跡が保存されている。かつてテルナテの中心部はこの辺りにあったらしいが、いまでは町外れになっている。1日6便のフェリーがテルナテとティドレを結んでいる。

11時にソアシオの町にある県(カブパテン)庁について、ブパティ(県知事)に会う。ティドレ島は面積約50平方キロメートル、人口5万人足らずで、かつてはアンボンの下でハルマヘラ中部行政区として位置付けられていたが、1990年にカブパテンに昇格した。このカブパテンは、ティドレ島に加えて、隣接するハルマヘラ島のかなりの部分を含んでいる。同様に、テルナテもハルマヘラの北部をその管轄下に含んでいる。巨大なハルマヘラの島が、一つの単位とならず、横に張りついた二つの小さな島に行政の中心を今日でも置いているのは興味深い。

ソアシオの町はテルナテの町に背を向けるように、ハルマヘラ島に面しているのだから、隣り合う島にあっても、両者が互いを見ることはない。この二つ



写真3 テルナテからティドレを望む

の島の存在は二項対立として構造化されていると捉える見方がある [Andaya 1993]。東インドネシアの人類学的研究が強調する観念の構造的な性格を、競合と抗争が織りなすモルッカ諸島の歴史に当てはめることは、きわめて興味深い、歴史の解釈における必要以上の観念化を引き起こす危険性もある。

ティドレ島は、マゼランをフィリピンのマクタン島で失った彼の船団が訪れた最初の島で、彼らはここで丁重なもてなしを受けている。この島は、キャプテン・ドレークが訪れたところでもある。彼が上陸した地点には、石組の突堤が残っており、それは真っすぐな道を経て海岸近くのたかみにあったティドレのスルタンの宮殿に続いていた。宮殿はいまはなく、その跡が整備されて広場になっている。37代に当たるという最後のスルタンは1967年に他界した。

#### IV ジャイロロへ

12月8日、テルナテからシダンゴリ行きのフェリーに乗る。シダンゴリはテルナテの対岸に位置するハルマヘラ島の交通のジャンクションである。8時40分出航、テルナテの町を左に見て進み、それから進路を右にとって、10時15分に到着する。そこから海岸沿いに、ジャイロロに向かう。途中、テルナテから4カ月前に移住してきたという人々の家屋群が、荒蕪地の雑草アランアランの野原に建てられている。この辺りでは、人々は焼畑で陸稲ととうもろこしを作り、ココ椰子を同時に植えて育つのを待つ。昼過ぎにジャイロロに着く。市場の向かい側に宿屋を営む家があってそこに泊まることになる。

次の日は、海岸に沿った北方のイブに向かう。途

中の道路に沿った家屋は、レンガあるいはブロックを用いて、レバーで開閉する窓ガラスを装備したものが多い。壁を先に作るものや、屋根を先に葺くものなど工法はさまざまである。家屋内には応接セットなどが見える。建築中の教会にしばしば出会う。各集落には伝統的な様式を残した壁のない集会所があり、ときにはその中にテレビが備えられて、子供たちが群がっている。インドネシアの変化が激しいことを実感する。もっとも、この土地で変化の原動力になっているココ椰子からとるコブラの値段は最近下がっているという。37キロメートルくらい進んだところで、道がぬかるみになり通行不能と判断して引き返す。

ジャイロロの郡長(チャマツ)の官舎は、港の近くにあり、オランダの行政官の住まいの様式をとどめている。チームリーダーの田中さんはかつて、渡部教授(元東南アジア研究センター所長)とこの同じ建物を訪ねたことがあるという。ジャイロロにはその昔独立した王国があったが、いつの頃かテルナテの支配下に入ったという。宮殿の跡はどこか分からない。ジャイロロではテルナテと同じことばが話される。

京大の調査チームは、昨年、スラウェシ島のメナドの北方にあるサンギル諸島を訪れている。地図を見るとスラウェシに次いでサンギルに近いインドネシアの大きな島がハルマヘラである。そのサンギル人が東ハルマヘラに移動してきており、ジャイロロの近くにも集落をつくって住む。日本軍の占領時代に華人のココ椰子園で働く者があったというが、現在では自分で土地を開いて所有している。小舟を用いた漁業と、焼畑による陸稲ととうもろこしの耕作、そしてココ椰子の栽培、生計の方法は土着の人々と変わらない。

ジャイロロは小さな町だが、市場にはミナンカバウ人の経営する食堂もある。町で大きな商売を営むのは華人である。コブラを買い付けて、米や日用雑貨を売る。もちろん、帳面付け払いが普通である。買い取ったコブラは、以前はテルナテへ運ばれたが、4,5年前からスラバヤへ直送されている。

#### V 移動する人々

ジャイロロの市場にはテルナテを経由してやって

きた、スマトラのブキットティンギ出身のミナンカバウ人が食堂を開いている。妻はジャワ人である。ジャイロロの町には既に述べたように華人が多いが、スラウェシから来たブギス人達も商業に従事している。町から外に出ると、既に述べたサンギル人やテルナテ人の移住者の他に、政府の外島移民計画（トランスミグラシ）で来住したジャワ人の集落もある。ハルマヘラ島の集落の多くは海岸沿いにある。内陸へ向かって開拓が進みつつあるが、海岸でも内陸でも移住者が目立つ。

テルナテ島やティドレ島でも移住者の存在が目立つ。ミナンカバウ人が経営する本格的なパダン料理の店も多い。もちろん華人の店も多い。テルナテの町の一角には、ファラジャワと呼ばれる集落があるが、そこに住む人々は、スルタン・スレイマンが追放されたときゴアから移住したと伝えられ、男子を通じてアラブ人、女子を通じて華人の血を伝えている。立派な陶器の飾り棚をもつ屋内で会った87歳の老人は、かつてアンボンで仕立屋をしていたと言い、この島の人々の移動性を垣間見せている。移動性といえば、この島で雇った運転手の一人は、漁師として出稼ぎの経験があり、下関を訪れたこともあるという。もう一人の運転手はメナドの出身で、ホテルの寮に泊まっている。

かつては、ポルトガル人やスペイン人が根拠地を構えたテルナテ島である。オランダ時代には、ダイヴェンボーデン氏がこの島の有力者で、町の半分が彼の所有地であり、多くの船と100人以上の奴隷を所有していたという。博物学者ウォーレスはこの人物の助力でポルトガル人が築いた城塞の近くに家を借りたのである。ウォーレスは当時の主要な住民として、テルナテ・マレー人、オラン・シラニ（混血のキリスト教徒）、オランダ人を数え、この他に多くの華人商人、少数のアラブ人、パプア人奴隷等を挙げている [Wallace 1869]。

大正10年、巡洋艦新高に便乗してテルナテに立ち寄った台湾総督府勤務の田澤震五という人物は、テルナテに9人の日本人が居住していることを記している。それらは、小雑貨店を営む斎藤直吉夫妻と生後7カ月の娘、球突屋をしている田中三太郎夫妻、氷屋を開いている富田壽蔵夫妻、それに華人の妻になっている女性2人であった [田澤 1922: 72]。

## VI 中心としての存在から周辺としての存在へ

香料群島の中心的な位置を占めていたテルナテとティドレは、オランダの介入とともにやがてその地位をアンボンに奪われる。小さな独立した政治単位が失われて、ジャカルタを中心とする行政組織によって階等付けられると、小人口、小面積、小資源のテルナテとティドレはその意義をさらに減退させていく。それでもかつての支配圏はその残影を今日の行政区画に僅かながら留めている。

人々の移動の手段が飛行機になった現在、テルナテの周辺化はさらに顕著になる。アンボンとテルナテを結ぶチャーター便は、我々の来島後まもなく機体検査のため2日間休便となり、12月11日から再び飛ぶ予定になっていた。西瀬さんと私は12日の便を予約した。当日早朝空港にいくとこの便はキャンセルされており、町に戻って翌13日の便で出発できることを確認した。アンボンで一泊することを諦めて、同日のうちに飛行機を乗り換えてウジュンパンダンに向かうように手配してもらった。13日の便は8時前にチェックインが済んだが、チェックインを午後1時にやり直してくださいという報せが入る。そこに町のエージェントの事務所で情報をキャッチした田中さんが魔法のように現われる。機内でははずだったスナックをもらってホテルに戻り、ホテルのベランダで海をみて過ごす。1時にチェックイン。飛行機はなかなか現われない。4時ごろに飛行機は6時10分に到着予定というアナウンスがあつて、やがて再度のアナウンスでキャンセルが告げられる。14日の便は少し遅れたが無事出発する。アンボンで乗り換えて、もともと一泊を予定していたウジュンパンダンを尻目に、走るようにジャカルタ行きの便に乗り換える。アンボンからジャカルタは、コンピューターが活躍する世界で、ウジュンパンダン空港のトランスファーデスクには、すでに準備された塔乗券が我々を待っていたのである。

土地の人々の行動は柔軟である。アンボン行きが難しいとみると、ウジュンパンダンやジャカルタに向かう人々の一部は、スンパティ航空の定期便を利用して、メナド経由というルートを選んだように見える。他の人は不満も言わずにただひたすらに待つ。それにつけても、テルナテとジャカルタを結ぶ

道は細い。テルナテはかつての交通の中心的位置から離島としての存在へ変化してしまった。テルナテはそれでも情報の孤島ではない。インドネシアを電波でつなぐ電話は、テルナテどころかジャイロロにいたるまで、すべての町を即時に結びつける。テレコムステーションには、夜間割引料金を利用しようと、時間前から待合室に座る人の数が増える。テレビもまたジャカルタの情報を直接地方に持ち込む。舗装も不十分な道路で辛うじてジャイロロにつながっているむらむらでも、集会所にテレビが据えられて、大人子供が群れている。そうしたなかで、人々は航空機やフェリーによる細い動脈を最大限に

活用して、島の世界は伝統的な移動性を保っている。

引 用 文 献

- Andaya, Leonard Y. 1993. *The World of Maluku*. Honolulu: University of Hawaii Press.  
田澤震五. 1922. 『南国見たままの記』新高堂書店.  
Van Fraassen. 1994. Ternate and Its Dependencies. In *Halmahera and Beyond*, edited by L. E. Visser. Leiden: KITLV Press.  
Wallace, A. R. 1869. *The Malay Archipelago* (Reprinted in Oxford in Asia Hardback Reprints in 1986).